

〔特集〕 韓国における女性の相続と財産分与に関する論考

吉田 ゆり子

16～19 世紀における日本・中国・韓国の伝統社会における家の継承と財産分与のあり方には、どこまで儒教の影響がみられるのであろうか。三国とも父系血統により家が継承されていたにもかかわらず、次のような相違が認められる。中国では、唐代以来、女性が財産分与から排除されてきたが、夫婦の財産は一体化し、子への相続に際して母親の同意が必要とされるなど、母親の実質的な地位は高い。韓国では、高麗時代までは女性も分割相続の対象であり、夫婦別産であったが、17 世紀半ば以降しだいに排除され、19 世紀初期には男性だけの分割相続となる。日本においても、南北朝時代までは女性も分割相続を受けたが、戦国時代には一期分となり、江戸時代には排除されることになる。こうした差異の要因を、儒教的な価値観、財産継承にまつわる現実的利害関係など、多角的に検討する必要がある。

そこで、2007 年度サントリー文化財団人文科学、社会科学に関する研究助成を受け、「東アジア伝統社会における女性の相続と財産分与に関する研究」を開始した。共同研究のメンバーは、大口勇次郎（お茶の水女子大学名誉教授・日本近世女性史）、文叔子（韓国国史編纂委員会・研究員〔当時〕）、鄭肯植（ソウル大学 法科大学・副教授〔当時〕）、臼井佐知子（東京外国語大学教授・中国明清史）、李長莉（Li Chang-li）中国社会科学院近代史研究所・教授・中国近代社会史（明清史）、吉田ゆり子（東京外国語大学教授・日本近世史、代表）であった。その後、2008 年には、科学研究費補助金基盤研究（A）「ジェンダーを巡る＜暴力＞の諸相-交差・複合差別における『家族親密圏』の学際的研究」（代表栗屋利江、2008～2013 年度）として、2009 年 3 月 21 日に、シンポジウム「問題としての「家」再論－存続装置としての養子システム、比較史的視点から－」を行った。

ここに掲載するのは、こうした研究の一環として、韓国語で発表された論考を日本に紹介することを目的として選定した、朝鮮時代家族史を専門とする文叔子氏（韓国学中央研究院教授）と、韓国の法制史を専門とする鄭肯植氏（ソウル大学教授）による既発表論文の日本語訳である。それによると、朝鮮時代は法制度上分割相続であり、女性へも財産分与を受けていたことが述べられている。また、夫婦の財産関係は明確に別産制であり、両論文とも結婚した娘の死後、娘の財産を婚家から取り戻す訴訟を実家が起こした裁判を取り上げている。しかし、鄭氏の論文によると、18 世紀にはいると、社会秩序の乱れから両班層が家門の存続を重視し、嫡長子優遇の相続傾向となり、母系は等閑視され、さらに家系継承のために養子が普遍化していったと指摘される。あわせて、儒教理念の浸透により、女性の貞節が強調され、儒教理念に基づいた女性像がつくられるようになったと述べられている。

今後、東アジアにおける女性の位置づけの同質性と差異性を比較しながら、その背景にある社会制度・理念の問題を解き明かしていく作業がさらに求められよう。

（よしだ ゆりこ・東京外国語大学大学院総合国際学研究院）